

組合活動から見た学園トップ：その変質

稲葉和夫

私は、1988年執行委員、1995年組合委員長、2000年組合副委員長、そして2007年再び委員長を勤めた。この20年余りに目のあたりにしたのは、学園トップの権力志向の強まりとそれとは対照的な意思決定能力の低下である。その象徴的な出来事は、2000年に開学した立命館アジア太平洋大学の記念式典会場の真正面に地球儀の上に掲げられた日本国旗である。この企画は、一体誰の指示に基づくものなのか、そのセンスを疑った。

更に、2005年に専断的に実施された教職員に対する一時金カットは、大学創造の原動力が教職員に依拠するという従来の考え方を否定するだけでなく、加えて2007年に一般理事会で決定された理事長・総長に対する退任慰労金倍増支給は、近年一部の企業にみられる利権構造そのものであることを明らかにした。

2017年に退職したのでそれ以降の状況は、把握することが出来ないが、このような立命館の歴史の恥部として残るような行動は、学園トップには決してとって欲しくないと感じるものである。

リベラルアーツ基盤型の大学づくりへ——「月曜会」7年の歩み

藤岡 惇

1991年に組合書記長、2010年に副委員長（BKC担当）を務めた。理工系教員による「理想の大学」の探究を支援できたこと——これが、この時期の私の鮮烈な体験だ。

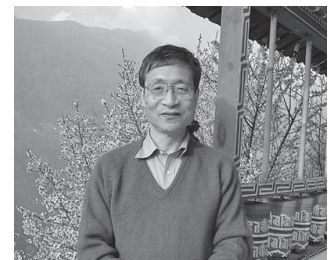
2005年末に理工系教員のたまり場を訪問、オピニオンリーダーだった池田研介さん（物理）とお会いし、「大学とは何をするとところか」を探究する「教員研究集会」を開くことを決めた。理工の教授会開催の前夜＝月曜夕刻が望ましいということで、会合名を「月曜会」とした。

2006年1月の例会が初回。2014年10月21日の「いま、大学とは何か——教学現場での取り組み」討論集会の共催が、月曜会の最後の仕事となった。この間に39回の例会を積み重ねた。毎回の参加者は6人～10数名。理工の基礎系の方が多い。池田研介、三浦正行（スポーツ健康科学部）、藤岡 惇（経済）の3名が世話役となった。

大学の使命とは何かの議論を繰り返した。①統治主体＝「自由市民」の形成の学＝リベラルアーツこそが使命のコア、②学生との協働こそ命、③理念なき箱物づくりとトップダウンは逆効果、の3点がコンセンサスとなったと思う。

月曜会の最終例会から半月後、吉田美喜夫さんが新総長に選ばれた。選挙人の研究室を総当たりするなど、理工の月曜会メンバーの頑張りはすごかった。

とはいえ、吉田総長時代の「理想の大学づくり」の模索は、業半ばで終わった。学部・専門を超えた「理想の大学探究運動」の再興を望む。その触媒に組合はなってほしい。



偉大な諸先輩方に学び未来を考える

芳賀 淳子

「21世紀における共生の可能性を求めて—大学の挑戦」の時期に、私は2004年女性部長のたすきを引継ぎました。2004年3月に退職された女性組合員は、加藤蘭子先生、伊藤澄子さん、石飛幸子さん、坂田典子さん、林政子さん、中井喜久子さん、松田八代子さん、三木理恵さん、7月末には増田弘子さんも。皆さんの経験を聞かずして、私たちの未来はない！昼休み1回の「定年退職者を送る集い」だけでは、時間が不足し、貴重な経験や組合運動の証を聞けないとの思いから、別途昼休みに女性部委員で「退職者懇談会」を連続で開催することにしました。退職者らが就職した時の採用職員は4人程。そのお一人お一人から、退職まで働き続ける秘訣、仕事と家庭の両立、出産・育児・子育てをどの様に乗り越えてきたのか、体験談と組合運動との関わりなど、アドバイスも含め語っていただいたのです。諸先輩方は女性トイレの要求、働き続けるための要求（育休・看休、半日休暇）、仕事の分担による男女平等、様々な業務の担当拡大、初の女性入試出張、女性の後は女性を採用、粘り強い組合運動により、一つ一つ要求の実現を勝ち取り、女性部の闘いの歴史と恩恵に与り、今